

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：13101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820030

研究課題名（和文）

弥生時代海上交通の考古学的研究

研究課題名（英文）

Archaeological Study of Maritime Traffic of the YAYOI Period

研究代表者

齋藤 瑞穂（SAITOH MIZUHO）

新潟大学・人文社会・教育科学系・助教

研究者番号：60583755

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、弥生時代の海上交通の復原を目的として、遠距離移動した遺物の集成、海浜集落の集成、交通を担った海人集団の復原という3項目の作業を実施した。特にについては、ケーススタディとして佐渡島をとりあげ、佐渡島の海人集団の動向を把握することができた。成果は、雑誌『古代』第128号ならびに『新潟考古』第23号に論文を投稿して公表した。

## 研究成果の概要（英文）：

In this study, I was carried out 3 tasks, in order to know how was the voyage of the Yayoi period. The first is the aggregation work of the artifacts that have been carried over long distances, and second work is the aggregation of the ruins of the Yayoi period that was formed along the coast. And, the third work is the restoration of the sea people.

In particular, I conducted a study of the sea people as a field on Sado Island. And found that, in the case of Sado Island, the changes in environment of the Yayoi Period affected the formation of the sea people based in the cave.

I have published the results of the above, at 'KODAI'No.128 and 'NIIGATA KOUKO'No.23.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	890,000	267,000	1,157,000
2011年度	1,110,000	333,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：弥生時代，日本海，海上交通

## 1. 研究開始当初の背景

『魏志』倭人伝は、弥生時代の海上交通

を現在に伝える一級の文献史料である。そ

れによれば、主に海岸に沿って航行していた点、一方で長距離を渡る技術もあった点、船は物流によく利用された点などが読みとれる。実際、弥生文化を特徴付ける稲作農耕や、青銅器や鉄器といった金属器は、海を越えて伝わってきた。

そもそも、原始・古代における交通そのものを扱った研究は極めて乏しい。考古学の分野においても、全く扱われなかったというわけではなく、近藤義郎「牛窓湾をめぐる古墳と古墳群」(『私たちの考古学』第3巻第2号, 1956年)論文以来の着実な積み重ねがあるが、多いとは言い難い。

また、多くの場合、交通に関する考古学的研究は地域ごとの検討にとどまっていた。複数地域の間で比較がなされるようになるには、90年代を待たなければならなかったと言える。

一方で、海上を運ばれたであろうモノの流通・交易の問題を扱った研究は多く、生産地から消費地までの流過程が、モノごとに細かく復元されている。ところが、この場合においても、モノの移動形跡同士を比較して、弥生時代海上交通の特質を総合的に明らかにするという視点はみられなかったと言える。

以上、古代以前の海上交通の研究が、中世・近世のそれに比べて大幅な遅れをとっているのは、扱う時代の古さに起因する資料的制約だけではなく、フィールドの分断と、比較検討の乏しさにも原因がもたらされる。

## 2. 研究の目的

本研究では、こんにちまでに蓄積されている考古学上のデータを駆使して、弥生時代の海上交通の復元をこころみる。特に日本海沿岸地域をフィールドとして、韓半島

から北海道島西部沿岸までの範囲で、どのような交通が行われていたのかを検討するとともに、その交通の担い手についても考察を加える。

## 3. 研究の方法

そこで、弥生時代の海上交通を総合的に復元していくために、本研究では、以下の3つの柱を設定した。

### ア 製作地から遠距離移動した資料の集成

弥生時代とその併行期(韓半島初期鉄器・三韓時代, 北海道縄文時代前半)を対象とし、日本海を介して遠距離移動した資料を集成する。遠距離移動したことが把握しやすい土器や石器石材はもちろん、金属器、玉類、自然遺物(南島産貝類)の移動についても、蓄積されている成果を網羅的に把握し、比較・総合化する。

### イ 交通・交易活動に関わった海浜集落の集成

発行されている遺跡地図や公開されているデータベースを参照して、海岸沿いの集落を集成する。日本海側を集成の対象とし、韓半島南海岸や南サハリンの情報の収集にもつとめる。

集成の結果をふまえ、アの遠距離移動資料の様相と照らし合わせながら、生産地・消費地を結ぶ津・泊りや航路を特定する。

### ウ 佐渡弥生時代海人集団の復元

海上交通の担い手の具体像を探るべく、ケーススタディとして、佐渡の海人集団の実態に迫る。

佐渡を選択した理由としては、まず第一に弥生時代の玉作遺跡(生産地)があり、その製品が広域に流通したと考えられてい

る点、第二に、佐渡市千種遺跡から櫂（オール）が出土するなど、遠距離を航行した海人集団の拠点が特定できる可能性が高い点が挙げられる。

まずは、千種遺跡や浜端洞穴など、1950・60年代に調査された遺跡の重要資料を、今日の眼で再実測し、あらためて資料の検討をおこなう。そして、海人が拠点とした津・泊りの位置、生業形態、生産集落との関係性を構造的に検討して、集団の特質を浮き彫りにする。

#### 4. 研究成果

以上の目的と方法に沿って研究をすすめたところ、イ・ウの目標は概ね達成することができた。

アについては、今後も継続して集成作業を続けていく必要があるが、少なくともイの集成については、すでに齋藤「東北北部における弥生時代の海岸遺跡（『物質文化』79, 2005年）で提示した東北地方のデータに加え、本州日本海側のデータをほぼ集めることができた。

結果、弥生時代の泊りが半島や山といったランドマークの近傍に数多く形成され、ランドマークに依存して移動が行われたという2005年論文での主張があらためて確かめられた。これは本島部のみに限定されず、島嶼地域でも同様の傾向がみとめられる。すなわち、佐渡島の場合、後述するように、農耕集落が発達した湾の入り口に泊りが形成され、そうした海岸集落を拠点とした人々が他地域との交渉を担っていたようである。今後は弥生時代の環境変動を考慮に入れながら、さらにその立地や継続期間の問題についても検討を深めていく所存である。

ウの海人集団の把握については、大きな成果を挙げることができた。本研究では、

特に佐渡島で活躍した海人集団の把握につとめたが、同島では現在の真野湾沿岸に発達した縄文時代の貝塚文化が、環境の変化によって衰退をむかえ、弥生時代になると、換わって外海に姿を現した海蝕洞穴を拠点として新たな漁撈文化が展開する。

佐渡市浜端洞穴出土土器の再実測を行い、資料の再吟味をしたところ、海上の往来が盛んな時期を2つ見出すことができた。そのひとつが中期後半の時期にあたり、もうひとつは後期終末の法仏・月影式期である。平野部の集落形成が微弱な後期前半は、海蝕洞穴の生活痕跡も乏しく、平野部の農耕集団と海人集団とのあいだで連動するようである。

中期後半の時期は、北陸系・東北系の両土器群が佐渡島に運ばれている。さらには、その両種が佐渡市平田遺跡のような拠点集落だけではなく、浜端洞穴のような小さな洞穴遺跡にも一定量存在することから、このような洞穴を拠点とした海人集団が往来を担っていることが想像された。

一方、後期終末の法仏・月影式期においては、土器にも連続性があり、長期継続的な利用がみとめられた。長期にわたって利用する中で、マツリの場合としても利用していたことがあらためて確認された。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

齋藤瑞穂、「新潟市法花鳥屋B遺跡「重弧縄線文土器」小考」『古代』第128号、2012年、査読有り

齋藤瑞穂、「浜端洞穴研究序説」『新潟考古』第23号、2012年、145~154頁、査

読有り

齋藤瑞穂，「＜第 1 回研究発表会の概要  
＞浜端洞穴と佐渡の弥生時代海人集団」  
『新潟県考古学会連絡紙』No.90，2011  
年，2 頁，査読無し

齋藤瑞穂，「いま，新潟で考えてみたい  
こと」，『新潟県考古学会連絡紙』No.88，  
2011 年，p2，査読無し

齋藤瑞穂，「古からの佐渡の文化を探る  
- 」『新潟大学人文学部資料展示室展  
示解説 - 』，2010 年，頁番号なし，査読  
無し

〔学会発表〕(計 1 件)

齋藤瑞穂「浜端洞穴と佐渡の弥生時代海  
人集団」，新潟県考古学会平成 23 年度第  
1 回研究発表会発表，於新潟ユニゾンブ  
ラザ，2011.10.22

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

齋藤 瑞穂 (SAITOH MIZUHO)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・助教  
研究者番号：60583755

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

なし